

## 「1945年8月6日」・翻訳

Traducció: Bàrbara Pesquer · Revisió: Kaori Nishii

一瞬とは何かと聞かれたら、あなたは答えられますか？それは、どのくらい続くものなのでしょう？そこからいったい何が変わるというのでしょうか？

一瞬とはある時点のこと。

1945年8月6日、全てが消える1秒前には、全てが存在していました。音すら聞こえないほど強烈な爆発が起こり、巨大な煙と火のキノコが地面から立ち上りました。それは、死というより、絶対的な無でした。

そこから生き残った人々もいました。当日2歳だった禎子さんは、屋外に吹き飛ばされました。母親の悲鳴は壊滅的な静寂を破りました。禎子さんは一見無傷で何事もなかったかのように見えましたが、その数年後、病に倒れました。診断は、その日に受けた放射能の原因による白血病でした。

幼い彼女には、自分の身に何が起こっているか理解できません。早くつらい病気から治りたいという気持ちがあるのみです。そんな時、誰かが千羽鶴を折ると願いが叶うという日本の古い言い伝えを教えてくれました。

禎子さんは、病院のあちこちから見つけた紙や処方箋や看護師からもらった紙を使って鶴を折り続けました。いくつかの折り鶴は非常に小さかったため、針を使って折らねばならないほどでした。結局彼女自身は644羽しか折ることができませんでしたが、友人たちの助けを借りて、千羽鶴を完成させることができました。

佐々木禎子さんは1955年10月25日に12歳で亡くなりました。その日から禎子さんの千羽鶴は舞い始めました。これらは世界中に広がり、数を増し、共有され、時空を超えて幸運と平和への願いを運んだのです。

「1945年8月6日」のプロジェクトは、作者が日本の男の子から受け取った一羽の折り鶴がきっかけで生まれました。だからこそ、これは通常のプロジェクトのように、見せて、感動させるためではなく、発信するためのものなのです。決して起こってはならなかったことの影響に苦しんだ人々の遺産を集めためのものです。それは、驚くべきことに、怒りや悲しみに満ちたものではなく、希望と平和を訴える叫びなのです。

街がまだ一つの都市で存在しありながら消滅しようとしていたとき、そしてすべてが無に帰した瞬間。それを共に見つめ、いまだ街に生きている黒い影の中を巡り、その影の中に、よく見ればすでに死のイメージが現れていることを、私たちは考えさせられます。

静寂の中に、子供たちの涙でできた湖の中に、子供たちの焼けた制服の匂いの中に、子供たちを包み込んだ空虚な空間の中に、身を浸して。

このプロジェクトは、作者が平和記念公園で受け取った折り鶴の叫びを、元の紙の輪郭を木炭で再現することで「使者」の役割を果たします。木炭は、木と火から生まれ、生きとし生けるものが時間の記憶を伝えるために役立つものです。

なぜなら記憶とは忘却への抵抗であり、過去を映し出すバックミラーであり、決してあってはならない事態に陥ることなく、前に進むためのものだからです。

**Carme García Parra**